コーちゃん・オーちゃんの「見つけた！豊岡元気人」

さまざまなデザインを手掛け、地域を盛り上げる

フラワーアートなどのデザイン・設計で、地域のまつりを鮮やかに演出する元気な男性を紹介します。

渡辺嘉人（わたなべよしと）さん（52歳）但東町中山

「玄武岩の玄さん」デザイン

たんとうチューリップまつりのフラワーアート

今年のたんとうチューリップまつりのフラワーアートは「玄武岩の玄さん」でした。デザインを手掛けたのは地元で表具店を営む渡辺嘉人さんです。

地域のために

渡辺さんは、約20年前、勤めていた会社を退社し、表具店を始めました。表具店を営む傍ら、地域のために貢献したいとの思いで、たんとうチューリップまつり（毎年4月中～下旬に開催）のフラワーアートのデザインを約10年間、手掛けています。

デザインを手掛けるきっかけは、まつりの実行委員長から「フラワーアートのデザインを作ってもらえないか」と依頼されたことです。

デザイン作成は、最初にえんぴつなどで大まかなイメージを描き、イメージが固まってくるとパソコンを使って形にしていきます。形になったものを写真編集用のソフトで、遠近法の処理をし、実際に球根を植える設計図へと仕上げます。長さ60メートル×幅30メートルの田んぼに描くフラワーアートは、だまし絵の手法を使い、まつり会場にある地上約8メートルの高さの展望台から見たとき、一番きれいなデザインになるように設計しています。

渡辺さんがデザインを考えるときは、「チューリップの花の色が5種類」、「細かい線が多いときれいなフラワーアートにならない」といったことに気を付け、できるだけシンプルに仕上げることを心掛けています。

フラワーアートのデザインがきっかけで…

たんとうチューリップまつりのフラワーアートのデザインが評判になり、現在ではシルク温泉やまびこの田んぼアート、地域で活動する団体のロゴなど、多岐にわたってデザインを手掛ける渡辺さん。デザインの依頼は春から夏にかけて集中し、渡辺さんは「デザインの考案は、プレッシャーを感じるより、楽しみのほうが大きいです。お客さんがどういう反応をするのか…」と話します。

まつり期間中は、シャッターマン（カメラのシャッターを切る係）として活躍する渡辺さん。「僕が撮る記念写真は割と評判がいいんですよ」と得意顔で話します。「なによりもまつりの来場者に楽しんでもらうことが一番。来場者の反応が良ければうれしい」。

まつりが終わっても8月ごろには翌年の球根を発注し始めるため、余韻に浸る間もなく、来年の構想を練らなくてはなりません。当年のまつりの会場で「来年はどんなアートにしようかな」など考えることも。「来年のフラワーアートのデザインはまだ言えません」と笑顔で話します。11月ごろには決まり、公表される予定です。

但東のチューリップまつりが一番と言ってもらいたい

小学校低学年を対象に剣道の指導をしたり、よさこいサークルのメンバーとして振り付けを考えたりと地域活動にも積極的な渡辺さん。今後の抱負を聞くと、「他地域でもチューリップまつりを開催しているが、『やっぱり但東のチューリップまつりが一番』と言ってもらいたい。そうしたまつりになるための一助になれれば」と話していました。

まちの話題

国内最大級の空の祭典！ コウノトリ但馬空港フェスティバル'13が開催

7月27日と28日、県立但馬飛行場（岩井）で、「コウノトリ但馬空港フェスティバル'13」が開催されました。

飛行機が、斜め上を向きながら横向きに飛行したり、垂直上昇から空中で静止し、失速反転する圧巻の曲技飛行や、真紅のクラシック複葉機と青色の曲技専用機が織り成すエアバトル（模擬空中戦）など、熟練の妙技で観客を魅了しました。

また、28日には、航空自衛隊のF－15戦闘機2機も参加し、轟音と、空を切り裂くような大迫力の演技に、大勢の観客から惜しみない拍手が贈られました。

▲全国各地から、貴重な飛行機が集まりました

日本・モンゴル民俗博物館体験教室　木工教室 木の板に描いた動物が目の前に登場！

8月4日、日本・モンゴル民族博物館（但東町中山）で、小学生を対象に、木工教室を開催しました。参加した児童9人は、動物などの立体パズルの作成に挑戦しました。

児童は、A5サイズ程度の木の板に見本の絵を写し書きし、豊岡総合高等学校の生徒に教わりながら、電動糸のこを駆使して図柄を切り抜きました。複雑な図柄を選んだ児童は、切り抜きに四苦八苦！

切り口を紙やすりでなめらかにすると、ラッコやシカ、恐竜の親子などが立体になって登場！組合わせを何度も確認するなど、誰もが出来上がりに満足そうでした。

▲切り取った図柄に仕上げのやすり掛け

笑顔の輪

壁面芸術「篆刻（てんこく）」に魅せられて 城崎篆刻同好会「楽葉会（らくようかい）」（城崎）

書と彫刻が融合した芸術・篆刻を楽しんでいるのが、楽葉会です。

会員は6人で、月に2回（第2・4木曜日）、指導に当たる稲葉節子さん（湯島）の自宅で教室を開催しています。

篆刻は、まず、四字熟語を選び、篆書の字体を決め、紙に印稿（印のイメージ）を書きます。その後、印稿を石に書き写し、印刀で字を彫ります。そして、最後に微調整をし、お気に入りの作品に仕上がれば、額などに入れ、飾ります。

稲葉さんは「日常生活でも、テレビや本などに出てくる四字熟語が気になります。石を彫り出すと、豪快な線や繊細な線など、個性が出るのが魅力的です」と話します。

また、会員からは「絵画と違い、赤と白の2色で、世界で一つだけの芸術を表現できる」「地味な作業ですが、一生やっていけそう」との声。楽しみ方も多様です。

「篆刻の字の読み方を聞かれたこともありましたが、今は芸術性を理解してもらえてうれしい」と、篆刻の魅力を広めるために、同会では、城崎を中心に、作品展を開催しています。さらに、8月25日から9月16日まで、県立但馬ドーム（日高町名色）で作品展を開催します。

今後は、「もっと、篆刻の魅力を伝えていきたいです。興味のある方は、いつでも体験にお越しください。自由な発想で篆刻を楽しんでもらえれば」と意気込んでいました。

入会希望は稲葉さんまで。☎32－4220

▲「自由に楽しむ！」が基本の教室